
転生したけど引きこもります。

こ～ぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

転生したけど引きこもります。

【Nコード】

N7095Y

【作者名】

こゝふ

【あらすじ】

死んで異世界に転生することになったミコト。ヴァンパイアになったのはいいけどまさかの引きこもり種族だった事実のうちめされつつ、仲間と陽光が届かないダンジョンでモンスター退治に勤しんだり、遮光カーテンを閉めた暗い室内で裁縫したり。引きこもり街道まっしぐらにがんばります。（作者は初心者です、誤字脱字があると思いますので見つけたら教えてくださると嬉しいです。また第一話の前書きは必ずお読みくださいますようお願い致します）

ミロトの学習ノート 世界編(前書き)

読んでおくと楽かもしれない。

(追加事項があったら随時更新)

ミコトの学習ノート 世界編

【世界について】

半円球のドームのような形をしており、「世界の端」と呼ばれる壁で囲まれている。

大陸は2つ。

世界の東にフィルレイ大陸、西にノーム大陸。

2つの大陸は世界の端にそれぞれ接していて、大陸間の交易は皆無に近い。

理由は間にある海を渡ることが難しいから。

フィルレイ大陸には国が11個あってここ50年は小競り合いはあっても戦争はない。

フィルレイ大陸最大の国はルドンで大陸の3割を占めている。

【ルドンについて】

信仰は明星と黄昏の双神「フィラ」と「リュウレ」。

王都を囲むように6の領がある。

冒険者ギルドと神官ギルドの発祥国で小規模のダンジョンが多数存在している。

王制ではあるけれど世襲制ではなく、6領の領主から選ばれる。

【ギルドについて】

一般的に15歳から20歳の独り立ちした者はいずれかのギルドに登録しなければならない。

20歳を超えて登録しないものやある一定の条件を満たしてしまつた者は、野党または特殊ギルド「奴隷ギルド」に登録される。

【冒険者ギルドについて】

登録資格は15歳以上。

支部数は二番目に多い。

税金は年20000セル。

ありとあらゆる依頼が集まりやすい、通称「何でも屋」。

設定可能職業は特になしだか必然的に武器職業となっている。

発祥地はルドン。

【魔術師ギルドについて】

登録資格は15歳以上で魔術が使えること。

支部数は最小。

税金は年50000セル。

個人依頼はほとんどなく、大半が国からの依頼。また、登録している者の8割が国定魔術師で各国の王宮勤めなのが特徴。

設定可能職業は魔術師のみ。

発祥地はルドンの北にある国サイロン。

【神官ギルドについて】

登録資格は15歳以上で医術（回復術）もしくは神術（予知や神託）が使えるもの。

支部数は三番目。

税金は年25000セル。

依頼は祭事関係や治癒関係のみ。信仰の関係上なのか上層部の内部衝突が多い。

設定可能職業は医術士、神術士。

発祥地はルドン。

【職人ギルドについて】

登録資格は15歳以上で各職業従事者の推薦を受けたもののみで、登録時に10000セル必要。

支部数は最大であらゆる街にある。

税金は最低10000セル以上で年収の2割と変動制。

依頼は専門的なものが多い。また店を構えるのにはギルドの許可が必要で無許可が判明するとギルドを追放される。

設定可能職業は鍛冶士（武器や装備品を作製）、調理士（料理や薬を作製）、建築士（建造物の作製）、会計士（販売店での販売買取）、製造士（武器・装備、料理・薬以外の加工品製造）、農作士（農家）、飼育士（酪農家）。

発祥地は不明。

【奴隷ギルドについて】

20歳を過ぎてもギルドに登録出来なかったもの、税金を納められなかったもの、ギルドを追放されたもの、罪を犯したものが登録させられる。

登録されたものは「隷属の首輪」を付けられ、労働力を求める者に買われるまで教育及び訓練を受け、労働を強いられる。

税金は年10000セルで奴隷所有者が払う、払えなかったら所有者もろとも奴隷ギルドに再登録される。

奴隷でなくなるには罰金及び奴隷でいた年数分の税金を払い他ギルドに登録資格を得たときのみ。

設定可能職業は奴隷。

発祥地は不明。

【職業取得について】

各ギルドで条件を満たして承認されると取得できる。

武器職業：所持している武器によって変わる。全系統武器のレベルが60を越えると武士という職業になるらしい。

魔術師：生まれ持った才能により魔術を使うとされる。

医術士：神殿に修行に入り医術を取得したらなれる。

神術士：生まれ持った才能で、予知か神託を受けれる人が神殿に修行に入り15歳を超えると貰える。

職人職業：各職業従事者に修行をつけてもらい、その人から推薦をもらう。

【土地・建物購入】

土地は領主もしくは地主に依頼。建物は建築士に依頼。建物付き土地の購入は領主もしくは地主に依頼のみ。

【奴隷の購入】

奴隷ギルドで各奴隷の能力価格と所属年数分の税金の2割を払うことで購入できる。

購入した奴隷は個人所属奴隷となり、所有者が死亡した場合奴隷も死亡する。

【ダンジョンについて】

入場にはギルドカードが必要、ただしパーティーの場合リーダーが持っていれば良い。

モンスターはいずれもフィールドに居るものより凶暴。

宝箱と呼ばれる物がまれに発見されるが出現条件は不明。

最終ボスを倒すとそのダンジョンは消える。

現在の確認ダンジョン数は268。

最大ダンジョンはルドンの西にある「銀樹のダンジョン」。

【モンスターについて】

世界に溜まる負の力が生み出したもの。

フィールドに居るモンスターの中には穏和（襲ってこない）なものもある。

倒すと世界に還りドロップ品を落とすことがある。

【ヴァンパイア族について】

世界の夜が産み出した希少種で精霊に近いとされているが、確認个体数があまりにも少ないため不明。

出生の法則も不明だが必ずある程度は成長した姿で生まれるとされている。

陽光下ではその身体能力の60%が発揮できないと言われており、直接陽光を浴びるとおよそ3分間で1割、日陰でも6分で1割の体力が削られる。

陽光の当たらないダンジョンや夜における身体能力は、おそらく全種族中トップと思われる。

暗視能力があるとおもわれる。

不老で長寿で寿命は1000年以上とおもわれるが、繁殖力はなのか極端に弱いため、ヴァンパイア族が子を成したという話は聞かない。

現在確認个体数8人。

【人間について】

世界でもっとも繁殖している種族。

身体能力は普通ながら繁殖力と適応能力が高い。

寿命は80年ほどで特定の発情期というものがない。他種族との子をなすこともできる唯一の種族。

【エルフについて】

別名「賢き種族」。

魔術才能を有したものを多く排出している。

寿命は600年ぐらいで繁殖力は低い。

同族意識が高く集団で集落を構成することが多い。

【ドワーフについて】

器用さは全種族中トップと言われており、戦闘能力も高いものが多い。

寿命は500年ぐらいで繁殖力は普通。

個人主義で同族で集落を形成することはほとんど無い。

【ドラゴイドについて】

戦闘能力が高く物理攻撃能力は全種族中トップ。

寿命は800年ぐらいで繁殖力は低いが多産。

主従思考が強い種族で大抵のものが主を決めていると言われてい

る。自ら奴隷になるものが多い。

【ワーキャットについて】

敏捷性が高い種族。

寿命は80年ぐらい繁殖力は普通で多産。

【ワーウルフについて】

嗅覚や索敵力が高く戦闘力もなかなかにある種族。

寿命は80年ぐらいで繁殖力は普通で多産。

【ラビトニアンについて】

戦闘能力は低いが器用で穏和な種族。

寿命は60年ぐらいで繁殖力が高く多産だが乳児の死亡率が高い。

【サンクラン族について】

世界の朝が産み出した希少種で精霊に近いとされているが、確認
個体数があまりにも少ないため不明。

出生の法則も不明だが必ずある程度は成長した姿で生まれるとさ
れている。

陽光の当たらない場所ではその身体能力の60%が発揮できない
と言われている。

陽光下での身体能力は、おそらく全種族中トップと思われる。

不老で長寿で寿命は1000年以上と言われているが不明。

繁殖能力が低くサンクランが子を成した記録はない。

ヴァンパイア族の対の存在と言われている。

現在の確認個体数21人

【精霊について】

生態および誕生についてほぼ不明。

世界が産み出したとも進化の果てともいわれている。

形状は様々でダンジョンの最終ボスとして存在するものもいるら
しい。

【個人的メモ】

銅貨 : 1セル

青銅貨 : 10セル

銀貨 : 100セル

金貨 : 1000セル
白金貨 : 10000セル

ミロトの学習ノート 世界編(後書き)

ホントは8話でいれる予定だったけど、追記しやすいようにしてみましたw

ミロトの学習ノート 人物・他編（前書き）

要るか要らないか微妙だけど作者にはとっても大事なところですよ

* *
（

ミコトの学習ノート 人物・他編

登場人物紹介（ステータスは登場時のもの）。

【ミコト】カガリ ヴアンパイア族 15歳 女 レベル1

属性：闇、雷、水

職業：槍術士レベル1、魔術士レベル1

控え職業：なし

称号：なし

所属：なし

所属ギルド：なし 冒険者ギルド

所持奴隷：なし

装備：ロンギヌス、回復の指輪、アイテムボックス腕輪型

常時スキル：暗視

任意スキル：鑑定、テレポート、闇魔術、水魔術、雷魔術、槍技能

特殊能力：取得経験値八倍、成長率八割増加、ステータス再振り、

第三職業

ステータス（<>内はレベル上昇による成長値）：

体力 240 20

魔力 240 20

物理攻撃 13 1.2

物理防御 14 1.1

魔法攻撃 11 1.2

魔法防御 10 1.1

速度 14 1.2

運 18 1.1

黒髪・黒目、148?、儂い系美少女、心の中はお喋りだが口数は少な目。

【界渡り者（享年36歳）】

【ナパーク 人間族 43歳 男 レベル73

属性：風

職業：剣術士レベル64

控え職業：槍術士レベル58、拳術士レベル61、弓術士レベル52、棒術士レベル55、調理士レベル1、製造士レベル1、会計士レベル21

称号：冒険者ギルドメロセフ支部長、双牙

所属：なし

所属ギルド：冒険者ギルド

所持奴隷：なし

装備：クリス×2、力の指輪、銀鎧、アイテムボックス腕輪型
常時スキル：なし

任意スキル：剣術技能

、弓術技能、調理技能、製造技能、会計技能

特殊能力：作業効率四倍

ステータス（<>内はレベル上昇による成長値）：

体力830 10

魔力319 3

物理攻撃81 1

物理防御78 1

魔法攻撃90.1

魔法防御550.7

速度871.1

運420.5

茶髪・青目、192?、一見地味目の普通の人だが、かつては国

にその名を轟かせた天才と誉れ高き猛者。とあるモンスターとの戦いで利き腕に怪我を追った時の後遺症の為あっさり現役を引退した。我が道を行く世話焼き人でミコトの一時的保護者。】

【リアマ エルフクオーター 人間族 59歳 女 レベル68

属性：水

職業：神術士レベル52

控え職業：医術士レベル32、水魔術レベル31、剣術士レベル8、拳術士レベル3、弓術士レベル2、調理士レベル15、会計士レベル11

称号：神官ギルドメロセフ支部長、受託者

所属：なし

所属ギルド：神官ギルド

所持奴隷：なし

装備：グラングリモア、知恵の腕輪、銀系の鎧、アイテムボックス
スペンダント型

常時スキル：索敵

任意スキル：医術技能、水魔術、剣術技能、拳術技能、弓術技能、調理技能、会計技能

特殊能力：受託

ステータス（<>内はレベル上昇による成長値）：

体力6448

魔力83214

物理攻撃380.5

物理防御450.6

魔法攻撃811.1

魔法防御721

速度650.9

運520.7

金髪・緑目、173?、エルフの血が混ざっているため老化がゆっくり。かつてはナパークと共に国に名を轟かせていた。

惚れた弱味でナパークに振り回される苦勞人でミコトの一時的保護者】

【ムウ ワーウルフ族 35歳 男 レベル51

職業：剣術士42

称号：冒険者ギルドメロセフ支部長秘書官

ミコトの感想「忠犬っぽい」】

【管理人様 色々不明 多分男

第107805世界の管理人

ミコトの感想「もうちょっと色々知識とかほしかったです」
対する管理人の回答「お主の場合はあれで色々限界じゃ」】

装備品補足

【ロングヌス 槍レベル

所有者 ミコトIIカガリ

ダメージ+500%、致命打率+25%、集中力+50%、状態
自動回復

「爆ぜよ、滅つせよ、そして再生せよ！」

【回復の指輪 指輪レベル

状態異常耐性60%、体力常時回復6%、魔力常時回復6%（回復速度は3分間）】

【クリス 剣レベル

体力+20%、速度+25%、致命打率+3%】

【力の指輪 指輪レベル

物理攻撃+60%】

【グラングリモア 魔導書レベル

所有者 リアマ

スキル治癒、スキル水魔術、スキル風魔術、スキル火魔術、スキル地魔術、スキル雷魔術、魔力+50%、魔法攻撃+25%

「我と契約せしものに偉大なる魔術をあたえん」

【知恵の腕輪 腕輪レベル

魔法攻撃+20%、魔法防御+20%、状態異常耐性20%】

ミロトの学習ノート 人物・他編（後書き）

人物は話が進むにつれて追加予定です。

第一話【アナタ ハ シボウ シマシタ】（前書き）

はじめまして、この度はお読みいただきありがとうございます。

当小説は蘇我捨恥様の「異世界迷宮で奴隷ハーレムを」に作者がインスピレーションを受け執筆したものです。

従っていくつか類似する設定が出てくる場合がございますことをご了承ください。

また、蘇我捨恥様へ事情を説明しており、掲載について今のところ問題なしと許可をいただいておりますが、削除してほしいといわれた場合は掲載を取り止めることになっております。

以上のことを踏まえた上で稚拙な文章を読んでくださるといいう方のみご購入ください。

第一話【アナタ ハ シボウ シマシタ】

白い空間と言うしかない世界で、私は独りぽつんと呆けていた。

【アナタ ハ シボウ シマシタ ツギ ノ セカイ ヲ センタ
ク シテ クダサイ】

目の前に浮かぶ文字と数多の選択肢っぽい単語がここは夢なんだろうか？と思うが…。

【アナタ ハ シボウ シマシタ】

その言葉に思い出されるのはこの空間に来る前に感じた激しい痛み。最近頭痛が多かったのは肩こりとか目の疲れだと思っていたが、まさか病気だったんだらうか？

って！ なに素直に受け止めてるんだ私っ！

どう考えても夢だつての！

小説の読みすぎかなあ、死んで転生とかテンプレすぎるわ。

うん、夢だと思ったら気が楽になってきた。

【アナタ ハ シボウ シマシタ ツギ ノ セカイ ヲ センタ
ク シテ クダサイ】

うーん、改めて目の前の文字と選択項目見てみたけど夢だからかつつか夢なのに選択肢多くない？

人種、文化、魔法、科学、国数に戦争頻度あとは魔物？

これ全部選んでるうちに夢から覚めそう。

まあ、こういう設定考えるの大好物だから良いけどね！

まずは人種の項目は人族・亜人族・魔人族かあ、全部欲しいから全部って2つまでかよっ！

うーん、じゃあさよなら魔人族……しくしく。

次は文化つと…あー文化の数かあ、意味わかんないしっ！

あっ日本文化とかそう言う特色かな？1〜48の間か…あんまり多くても面倒だし12ぐらいでいいかあ。

魔法と科学は各0〜10で足して10以内にするのか……夢の中なのに細かい設定だな私っ。

魔法3で科学が1にしとくか、科学0とか現代っ子は死ねるしね！まあ、1がどんぐらいのレベルか知らないけど。

後は国数と戦争頻度か、国数は15〜20を選択して戦争頻度は10段階の3に設定っつと。

魔物はダンジョンかフィールド……、あっ両方でも良いのか。

両方を選択して決定する。

【セカイ ノ セツテイ ヲ カクニン シマシタ ツギ ノ セ
ンタク ニ ススンデ クダサイ】

文字が変わってまた選択肢が出てくる、ゲームで言うところのキャラ作成のような感じかな。

種族選択、性別選択から始まり、年齢と容姿に体型かあ、ちょっとダルくなってきたかも…。

亜人族は選ぶ度にランダムでさらに種族が出てくるのか、まあエルフとかドワーフ、犬耳系とか猫耳系とかみたいな感じね。

…

…

…

…

…

…

…

……うー、決まらない。

ウサギ耳も良いし猫耳も良い！だがエルフも捨てがたい。
ちなみに種族によってレア度が有るみたい。

人種が したら犬耳と猫耳やら良くあるよねーってのが
エルフとかドワーフが 。

龍族とか精霊っぽいのが

まあ、そんなものだよねーっと思いつながら選択し直し続ける。

胸はまあ程よくくぐらい？

細身で顔はヴァンパイアのデフォなのかきつい顔が基本設定だった。まあ、いじりにいじって二重のパッチリ目、だけど全体的に儂い系。設定だからだろうけど無表情がコワイ。

まあ、なかなか満足のいく美少女に仕上がったからこれで決定つと。

【コジン ノ セツテイ ヲ カクニン シマシタ ノウリョク
ボーナス ヲ センタク シテクダサイ】

敢えて言おう、まだ続くのか！！

文字の下に現れたのはゲームのスキル画面みたいなもの。
ボーナスポイントは種族選択のように選ぶ度変わって1〜99まで
あるみたい。

… 54、もうちょっと

… … 18 論外

… … … 25 まだまだ

… … … … …

さっきから20〜35あたりをいつたりきたり。

さっきの54で妥協すべきだったかな？

第一話「アナタ ハ シボウ シマシタ」(後書き)

3話まで連続で投稿します。

第二話「とじろでいって夢ですよね」(前書き)

いまだに異世界にたどり着いてない件…。

第二話「とじるでこねって夢ですよね」

いい加減目が覚めてもいいんじゃない？ってぐらいには時間が経ってる気がする。

まさか本気で死後の世界？

いや、ないない。

ない、よねえ？

【ボーナスポイント ヲ フリワケテ クダサイ】

相変わらず無機質で読みづらい文字が浮かぶ。

ハイハイ、んつとまた項目多いなあ。

取得経験値二倍（3P）と成長率二割増加（3P）は必須だよね。

選ぶと取得経験値四倍（6P）と成長率四割増加（6P）の項目がある。

さらにそれぞれを選ぶと取得経験値八倍（12P）と成長率八割増加（12P）が出てきたので選んでみる。

それぞれの項目が白くなってそれ以上は出なかった。

これで42Pも使うのかあ。

あとは……ん？

なにこのボーナスポイント再振り（12P）って？

んーあれか、ネットゲとかにあるステータス再振りみたいな？
よし、迷わず選択。

これで54P使用、残りが45Pつと。

あと使えそうなのは…、鑑定(3P)

テレポート(3P)

第二ジョブ設定(3P)、第三ジョブ設定(6P)、第四ジョブ設定(12P)

残り18P。

うーん、ジョブ設定削ろう。

第四ジョブ設定(12P)無くして、残り30P。

ボーナス武器・槍1(3P)、ボーナス武器・槍2(6P)、ボーナス武器・槍3(12P)

ボーナス装備・指輪1(3P)、ボーナス装備・指輪2(6P)

これで使い切ったかあ。

よし、決定つと。

【セッテイ ヨ カクニン シマシタ】

その文字に満足する。
時間かけたし感慨深いなあ。

んで、どうなるんだろう？

「その設定で異世界行くに決まっておる」

……………は？

「この度は我が管理下の第107805世界を選んでくれて感謝する」

だれ、この人。
突然目の前に現れた人を凝視する。

「我は世界の管理人じゃ、おぬしを我が管理世界に導こう」

あー、テンプレの神様こないと思ったらここで来たのかあ。

「神ではなく管理人じゃがな」

…考えてることが読まれてるパターンですね、わかります。

「うむ、理解が早くて助かるの」

とりあえずお約束の状況説明を希望します。

「おぬしは死亡した。そして今行っておった世界選択に失格せずに我が管理世界を選択した、故に連れて行くのじゃ」

失格したらどうなるのか非常に気になるんですけど…。

「失格というのは、世界選択において該当世界が空いていない、もしくは技能レベルが最大となった世界選択をした場合は元の世界の輪廻に戻るのじゃ」

空いていないって言う意味も分からないんだけど、あとなんで技能レベルが最大だとダメなの？

「空きは空きじゃ、異世界より呼び込まれるのは世界ごとに決まっておるからのう。」

技能レベルが最大の世界は飽和世界となつて、基本的に滅びるからじゃ」

へえ…、ところでこれって夢ですよね。

「夢ではない」

……………ねーよ。

ないない、妄想おつっだよ。

「だから現実じゃ、おぬしの場合今から行く世界で死んだら魂がおそらく消滅する」

なんでさー！

「ヴァンパイアは不老長寿、繁殖力が酷く乏しいゆえに次代をなかなかつなげられぬのじゃ」

だから？

「お主の血縁がおらぬのでは魂は世界に耐えられずに消滅する」

なんですか！！

「本来、魂とは血によって世界に留められているものじゃ。界渡りとして転生するゆえお主と血の繋がる者…つまるところの血縁者はおらぬ」

…すみません、召喚じゃなくて転生なら両親とか親類いるんじゃないの？

「おらぬ、これから行く世界ではヴァンパイアは世界が生み出すものとなっておる、したがってお主も世界が産み出すことになる。ちなみに赤子の時期はなく先ほど作成した姿で転生となる」

さすがレア度　だねっ！

他にもヴァンパイアっているの？

「ふむ…累計で500人ほどかの」

少なっ！　世界の広さと人口知らないけどね。

「まあそれはいつてからの楽しみじゃ」

ふーん。

で、いつ夢から覚めるんだろう？

「だから現実じゃ、おぬしは死んでおる」

じゃあ死因はなんだ！
心臓発作か？脳梗塞か？！

「銃弾で頭を打ち抜かれて死んだのじゃ」

なんでさ！

「流れ弾と言うものじゃな」

最悪だっ！

死因最悪すぎるだろ！！

…

…

…

…

…

…

…はあ。

「諦めがついたかの」

とりあえず、死因聞いたら色々浮かんできましたから。
死ぬ直前の色々がっ。

「では行こうかの、おぬしの名を名乗るがよい」

「果^{かがり}雁みこと、ついでに享年36歳」

「うむ、享年は別に要らんのだが」

なんとなく言ってみました。

「まあよからう」

うん、気にしたら負けってやつです。

「世界とおぬしを繋げたぞ、我から特別に行く世界の10歳ぐらいの幼子が知ってる常識を与えよう」

まじかつ！

神様優しいね。

「神ではなく管理人じゃ」

オッケー、管理人様優しいねっ！

「では、いつてこい」

行ってきます。

第二話「とじろとじわって夢ですよね」(後書き)

あと一話投稿して今日の分は終わりです。

【閑話】 管理人から見た世界選択（前書き）

内容薄くてごめんなさい

【閑話】 管理人から見た世界選択

【界渡りが現れました 世界設定完了 該当世界候補の管理人は至急お集まりください】

脳内に響いた天啓にその場にいた管理人全員が顔をしかめる。

若い管理人が文句を言いながらも移動を開始する中、年配の管理人は動かない者が多い。

彼らは界渡りの枠が埋まっている世界の管理人なのだ。

界渡りが世界に降り立つ数は世界ごとに決まっている。

中には万を超える世界もあればたった一人という世界もある。

管理人に預けられる世界は大体一人千ほどといわれている。

「やれやれ、若い者は面倒ごとが嫌いな物が多いのう」

「そういうおぬしも面倒ごとはきらいであろう」

中堅と思われる管理人がのんきに界渡りを見守る。

「世界の設定で失格しなかったのはともかくとして、亜人族のレア種【ヴァンパイア】が住まう世界か」

「魔人種【ヴァンパイア】ならともかく、希なことだな」

「ともあれこれで世界は一気に絞り込まれたんじゃないか？」

「【亜人族 ヴァンパイア種】を有していながら文明度が3しかないからな、奇運のもちぬしか？」

「粘り強いだけかもしれんぞ？」

もちろん最初の世界設定にもよるが、基本的に十万分の一ぐらいの確率でしかヴァンパイアは出ないといわれている。なぜなら【ヴァンパイア】は魔人種か人の手によって産み出されている…、つまり技術力の高い世界にいることが多いからだ。

「ふむ、今の空き世界で該当するのは我とおぬしを含め12人で43世界か」
「意外と多いな」

ここからはボーナスポイントをいうもので選定される。高ければ高いほど古い世界が選定される。

「我的世界は3つで34、35、76、78、96、99じゃな」
「ふむ、私は1つしかなくて51、53だな」
「早く終わって欲しいものじゃ」
「うむ」

普段であれば50台、70台で妥協するものが多い。粘り強いものでも80台がほとんどだ。稀に幸運に巡り合って90台前半のものも現れるが…。

しかし、今回の選定は彼らにとって試練とも言えるものになった。

…

……

……

……

……

.....
.....
.....

「いったいどれほどの時間が経っただろうか？」

「12人の管理人は疲労していた。」

「原因は只一つ。」

「界渡りがボーナスポイントを選びなおしているからだ。」

「何回目だ？」

「もう数えたくもないわ」

「若い管理人からそんなぼやきが漏れるのも仕方がないだろう。」

「だあああついいじゃん82！なんでやり直すんだよっ」

「70P以上がでるとまさに阿鼻叫喚であった。」

「もはや粘り強いとか言う問題ではなかった。」

「無機質に淡々としておるの」

「うむ。種族といい、あれに当たった管理人は気苦労が多そうだ」

「90台の管理人は3人。」

「一人を抜かし鬱々としていた。」

「なんか楽しそうですわね、私達の可能性が高いのですよ？」

「いやなに、もし我が当たったらなにか褒美をやるうかと考えておった」

「ちよっ！」

当人以外の全員が慌てる。
過度の干渉は違反行為だ。

「なに、ちと世界の常識を授ける程度じゃ」

「……まあ、ぎりぎりですわね」

ただでさえヴァンパイア種、しかも予想が通りなら90台はもはやチートだ。

管理人がさらに能力やアイテムを授けたら世界が狂う。

管理人は管理をするものであつて、故意に干渉していい存在ではない。

「ん？」

「決まつたみたいだね」

界渡りの前には99の文字が輝いていた。

11人の管理人はほつとしてその場を去る。

「ほどほどにな」

「うむ」

残された管理人は11人を見送ると改めて息をつく。

「さて、彼女が降り立って世界はどうなるかのう」

【閑話】 管理人から見た世界選択（後書き）

あってもなくてもいい話だったかもしれない。

第三話【陽光下での身体能力60%減】（前書き）

やっと異世界に到着。しかし自分でかくのって大変ですね。。。

槍の名前と効果を変更…。

ロムルスの槍は知名度が低かった（T・T）

第三話【陽光下での身体能力60%減】

引き寄せられるように目が覚める。
もちろん見えるのは知らない天井。

起き上がって体を確認してみるが、見事に作成したキャラクターだった。

ヴァンパイアについて考えると脳内に知識が浮かび上がる。

【ヴァンパイア族

世界の夜が産み出した希少種。

不老。暗視。怪力。魔力大。体力大。

人間との見分けが難しい。

【陽光下での身体能力60%減】

…は？陽光下での身体能力60%減？
聞いてない。

あー、でも灰になるよりはましかなあ。

現在地と考えるとまたもや脳内に浮かび上がる。

【大陸名：フィルレイ

国名：ルドン

街：アームルト領 メロセフ

建物：篝火の宿 206】

親切だな。

10歳までの一般常識がどんなものかはわかんないけど、とらあえ
ず生きて行くには困らない程度らしい。

大体15〜20歳で独り立ちかぁ。

私のステータスはどうか？

【ミコトカガリ

ヴァンパイア族 15歳 女 レベル1

属性 闇、雷、水

槍術士 レベル1

魔術師 レベル1

なし

称号 なし

所属国 なし

所属ギルド なし

装備品 ロンギヌス、回復の指輪

所持金 107805セル

控え職業 なし

常時発動スキル：暗視、鑑定

任意発動スキル：テレポート、闇魔術レベル1、水魔術レベル1、
雷魔術レベル1、槍技能レベル1】

ふむ。

常識では魔術師は少なくて才能が必要。

大体人間や獣人だと一万人に1人の割合、エルフとかドワーフだと1000人に1人か。

しかも第二・第三職業と言う認識はなく、武器職業以外は各ギルドでの承認で職業が変わると。んで職業が変わるとその職業固有のスキルが使えなくなるのか。

ギルドは冒険者ギルド、魔術師ギルド、職人ギルド、神官ギルドか。

あー、テレポートって魔術師固有かあ。

魔術師ギルドじゃなくて冒険者ギルドに登録したいし、あんまり人前で使わないでいようっと。

さて、この槍と指輪の性能はっと…。

【武器鑑定

槍レベル

ロングヌス

所有者 ミコトカガリ

ダメージ+500%、致命打率+25%、集中力+50%、状態自動回復

「爆ぜよ、滅つせよ、そして再生せよ!」

【装備品鑑定

指輪レベル

回復の指輪

状態異常耐性60%、体力常時回復6%、魔力常時回復6%】

あはは……、チート武器だよこれ。

しかも所有者が刻まれてるから私以外は持てないとか、なんて都合主義つ。

普段はペンダントサイズのようになっていて、使うときに大きくな

るらしい。

さて、状況確認もしたしどうしようかな。

所持金は管理人様がくれたみたいだけど、潤沢すぎるんじゃないだろうか？

年収が一般人で大体50000セル。

それなりの冒険者で大体80000セル。

107805セルは15歳の小娘の持つ金額じゃないだろう…。

大金持つてるの怖いなあ。

盗難的な意味でっ！。

この世界に銀行ってないし…。

ギルドに早く登録してカードもらうかあ。

ギルドカードはお財布もかねてあって、所有者が刻まれるから本人以外は使えない。

まあ、無くしたら見つからない限りその中のお金は無くなるんだけどねっ！

カード自体は再発行可能。

あと冒険者の必須小物、アイテムボックスも買わないと…。

アイテムボックスについても形は様々で一般的なバッグや指輪はモチロン、腕輪やネックレスタイプもある。

うん、そうと決まれば早速冒険者ギルドに行きますか。

第三話【陽光下での身体能力60%減】（後書き）

今日の方はこれにて終了。

第四話「現在すでに死にそうです」(前書き)

もう死亡フラグな件(、、)

第四話「現在すでに死にそうです」

一時間前の自分に言いたい。

なぜ陽光下で身体能力が60%減なのを忘れていたんだ。

現在すでに死にそうです。

なるべく日陰を選んでいるが、正直キツイ。

宿屋で聞いた冒険者ギルドまで後少しとは言え、マジ死にそう。

これ、常識知識にはないけど実際体力削られてるっばい…。

回復の指輪がなかったら今頃瀕死かもしれない。

なぜ昼に行動しようと思ったんだ私！

…

…

…

…

そんなこんなで割と危機的な感じで冒険者ギルドに到着。

途中で購入した日傘がなかったら死んでたかもね！

100セルもしたけど良い買い物だったわ。

だいぶ重いけど…。

「すみません、ギルド登録をお願いします。」

空いてるカウンターで事務員さんに伝えるとすごく驚いた顔をされた。
「なんださ！」

「お嬢さんが？えっと遊びかなにかかな？」

「いえ、本気です」

「……………」

「……………」

沈黙されたので沈黙してみる。

「失礼ですが年齢はいくつですか？」

「15歳です」

「……………はあ、まあいいでしょう。こちらについてきてください」

多少戸惑われつつもギルド登録の部屋に案内される。

「これよりギルド登録を行います」

「はい」

青白く光る魔法陣の中央に立つ。

ギルドカードに個人の情報を書き込む作業だ。

ちなみに15歳以下はこの魔法陣が発動しないらしい。

「心を静めてください。少し頭痛を感じるかもしれませんが、すぐに治まるので大丈夫です」

言われて青白く光る魔法陣を見つめると、光が強くなり身体を突き

抜けていく。

頭痛と言うよりも浮遊感を感じながらしばらく動かずにいると光が元に戻る。

「登録完了です、こちらがアナタのカードです」

確認すると名前、種族、性別、年齢、レベル、所属ギルド、職業（第一職業のみ）、所持金が記載されている。種族があるのは頂けないなあ。

「所持金などは他人に見せたくないんですけど」

「でしたらこちらの台にカードを乗せて、所持金と種族しか隠せませんが隠すよう念じてください」

言われて隠れるように念じる。

「完了です」

あっさり終わった。

なんだか拍子抜けのような気もするが、こんなものと常識知識が告げている。

「他にご用はございますか？」

「所持金をカードに移すのと、アイテムボックスを購入したいのですが」

「わかりました、受付で行いますのでこちらにどうぞ」

事務員さんが事務的です。

最初の驚きはどこにいったんだろう？

受付カウンターに戻ると早速持ってきたバッグからセルを取り出す。107705セル（白金貨10枚、金貨7枚、銀貨7枚、銅貨5枚）を見て一瞬固まった事務員さんであったが、何事もなかったかのように取り出した箱にセルを入れてカードを上に乗せる。

「……………はい、完了です。あと、あんな大金をあまり貨幣で持ち歩かないでください。」

「はい」

ちよつとした忠告付きでカードを返される。ちなみに箱に入れたセルは消えるらしい。仕組みはよくわからない。

「……………ではアイテムボックスですが、形状はどうなさいますか？」

「腕輪をお願いします」

「わかりました、見本をご用意しますのでしばらくお待ちください」
立ち上がろうとして事務員さんが気がついたように私をみる。

「時間が少しかかりますので、よろしければあちらの依頼掲示板をご覧になっては如何ですか？」

「そうですね、そうします」

言われて掲示板の方を見ると、如何にも冒険者って感じの人がいっぱいいた。

依頼ランクの掲示板を見ると探し物だの、たいていが雑用だった。

まあ、冒険者ギルドってある意味何でも屋だしね。
ちなみに職人ギルドがある意味職業やお店の斡旋所って感じ。

ぼーっと見てるといつの間にか事務員さんが後ろにいてビビった。
この人、実は実力者だったりして。

【個人鑑定

ナパーク 43歳 男 レベル73

職業 剣術士レベル64

所属ギルド 冒険者ギルド

称号 冒険者ギルドメロセフ支部長】

うええうつ支部長がなんで受付事務員してんのさああっ！

驚愕に目を開いたままでいても事務員さん…。

基、ナパークさんは気にしないでいるのか普通にカウンターに案内して腕輪を見せてくれた。

「こちらがミコト様の所持金で買えるアイテムボックスの腕輪形状です」

あー、この人は所持金知ってるから絶対買えない物は持ってこなかったのか。

しかし、色々あるんだなあ。

鑑定スキルを使ってよさそうなのを選ぶ。

【装備品鑑定

アイテムボックス 腕輪

素材 金 オブシディアン

容量 6500】

価格 30000セル

【装備品鑑定

アイテムボックス

腕輪

素材 金 サファイア

容量 6800】

価格 32000セル

【装飾品鑑定

アイテムボックス

腕輪

素材 白金 オブシディアン

容量 8500】

価格 52000セル

【装備品鑑定

アイテムボックス

腕輪

素材 白金 エメラルド

容量 9000】

価格 55000セル

高いのか安いのか微妙です！

いや、普通にアイテムボックス自体が高いんだけどね！！
値段に悩んでいるとナパークさんがアドバイスをくれる。

「白金で出来たものは一生物としてお使い頂けますよ」

「やっぱりそうですよね……」

「私のオススメはこちらのオブシディアンのほうです」

おや、てっきり高いほうかと思ったけど違うみたい。

「重量の問題なのですが、エメラルドは重いものを収納するのにはむいていません」

「そうなんですか」

「その点、オブシディアンを使ったものは重量制限がありません」
「へえ」

そんな優れものなのになんでエメラルドのより安いんだろう？

「とはいっても、一般的なドロップ品を収納するにはそこまで重量に気を遣いませんけれども」

「あ、そっか…」

ドロップ品で単品の重量がものすごくあるものを落とすモンスターなんてそうそう居ない。

居ても超上級者でなければ狩れないだろう。

「それから…ミコト様はおそらく闇属性でしょうからオブシディアンの相性がいいと思いますよ」

「え…」

「申し訳ありません、カード作成の時に種族が見えてしまいましたもので」

「あー、いえ…できれば他言無用でお願いします」

「もちろんでございます」

そっかー、そりゃそうだね。

しっかし…うん、何だろー弱みを握られた気分。

「じゃあ、オススメのこれにします」

白金とオブシディアンで出来た腕輪を指差す。

「かしこまりました、所有者を刻みますので少々お待ち下さい」

ナパークさんが他の商品を下げて選んだ腕輪を取り出した台の上に置く。

ギルドカードも置いたので精算も一気にするらしい。

台がほんのり光って所有者を刻み終えたらしい。

本当にこういったことの仕掛けはどうなってるんだらう？

常識知識では「そういうもの」となっている。

オーバーテクノロジー？

第四話「現在すでに死にそうです」（後書き）

補足的なナパーク視点と管理人様視点も近日公開予定です。

【閑話】ナパーク、出会う。(前書き)

ナパークは主人公にとって重要な人になる……予定なんです。

【閑話】 ナパーク、出会う。

冒険者ギルドメロセフ支部長のナパークの趣味は、受付に座ってギルドを訪れる若者を見守ることである。

若い頃は国から勧誘がかかるほどに活躍していたが、モンスターの攻撃で利き腕に怪我を負ったのを機にあっさり冒険者ギルドの事務員になった変わり者だった。

そして今、彼の前で未来広き若者が魔法陣の中央に立っている。魔法陣は無事に発動して彼女の目の前にカードが浮かび上がった。

ナパークが確認のためカードを見て思わずかたまってしまった。

【種族 ヴァンパイア】

現在確認されている個体数最小のヴァンパイア族。それが今まさにナパークの目の前にいるのだ。

少女、ミコトにカードを差し出すと眉をひそめられた。

「所持金などは人に見せたくないんですけど」

(ヴァンパイア族なんておおっぴらにしたら、どこぞの愛好家やらに目を付けられますしね)

「でしたらこちらの台にカードを乗せて、所持金と種族しか隠せませんが隠すよう念じてください」

所持金はもちろん、種族も差別が発生して問題になる場合があるため秘匿できる。

ナパークは目の前のミコトが心配でしかたがなくなってきた。日傘を差していたとはいえ、こんな陽気の良い日に出歩いていることから、もしかしたらあまり自身の種族を知らないのかもしれないと予想したためだ。

（確か旅の途中で会ったヴァンパイア族の男も自身の種族をあまり知らなかったな、ヴァンパイア族とはそういうものなのだろうか？）

ミコトが所持金の移動とアイテムボックスの購入を希望したので、ナパークは内心ほっとした。

（購入作業が終わるころにはきっと陽も傾いているに違いない）

そして受付で持っていた袋からおもむろに取り出された金額にナパークは頭を抱えなくなった。

（こんな少女にこんな大金を持ち歩かせたのは誰だ！）

所持金を移動する間、ミコトを15歳まで育てたであろう知りもしない人物に怒りがこみ上げてくる。

「はい、完了です。あと、あんな大金をあまり貨幣で持ち歩かないでください」

「はい」

ミコトの表情から自覚はあったようだ判断すると、ナパークは次の用件に移る。

腕輪形状のアイテムボックスを要求されたので席を立ち上がりかけてふと動きを止める。

(いつそずっと使える物をだしてみますか、資金はあるようですし…)

そうならば取ってくるのに時間が掛かる。

その間ミコトが退屈するだろうと依頼掲示板を勧めた。

(一生物なら白金ですが金の物でもなかなか使えますよね)

白金物を5種類と金物を6種類、あとは銀と銅、鉄の物をそれぞれ10種類選ぶ。

(ヴァンパイア族は闇属性が多いと聞きますからオプシディアンの物がいいですかね)

とはいえ、趣味もあるだろうと他の宝玉を使ったもの物選んでいた。

ちなみにナパークの愛用しているアイテムボックスも白金とオプシディアンの物だった。

もちろんデザインはかなり違う。

ナパークのはそれこそ防具にもなりそうなゴツい物だが、ミコトに選んでいるのは華奢なデザインのものだ。

選び終えて受付に戻るとミコトはまだ掲示板を見ていた。

驚かせないようにとそっと近付いてみたが逆に驚かれてナパーク自身も少し驚いたなど些細なこともあったが、何事も無かったように受付で腕輪を選び始めた。

そして、ナパークは失礼だと思いつつもミコトが腕輪を選んでいる間、紙にヴァンパイア族の特徴と注意事項を書いていく。

ナパークの中でミコトの保護者は使えないダメなヤツとなっていた。

(こんなものですかね?)

書き終えてミコトを見るとまだ悩んでいるらしいので、よかれと思いきくつかアドバイスをする。

結果、アドバイスに微妙な顔をされてしまい些か出しゃばりすぎたかとも反省するはめになった。

【閑話】ナパーク、出会う。(後書き)

ナパークは世話焼きさんなんです。

第五話「だが断るっ」(前書き)

話がなかなかすすまないです)・・・)

第五話「だが断るっ」

用事も終わり、さあ帰ろうと言うところにナパークさんがまったを
かけてきた。

「まだ陽が傾くには時間がかかりますよ」

しまった！

陽光下でのあの危機的状況を忘れてた！

とは言え、掲示板も見たしすることもないし…。

あーでもない、こーでもないと思っていたら、またもやナパークさ
んが紙を差し出してきた。

「えっと？」

「失礼かとは思いますが、ミコト様の保護者の方はアナタの種族に
つついっ詳しくないようですので、わたくしの知る限りの事を書き出
してみました」

親切だ！

なにこの人親切すぎるっ！

「ありがとうございます、助かります」

素直に受け取って礼を述べるとナパークさんが言いにくそうにして
いたので首を傾げてみる。

「えっと？」

「いえ、アナタを保護していた方はどういう方なのかとおもって…」

保護者……、管理人様は保護者じゃないし。

「そのような人は居ませんけど……」

「は？」

あれ、なんかすごく驚かれてる？

「居ない、というところ……つい最近独り立ちされたから今はいないという意味でしょうか？」

「えっと、そもそも居ません」

「……………は？」

あれ……、なんかやばい？
なんか変なこと言った？

「アナタを15歳まで育てた人が居るはずですが……」

え？ヴァンパイア族って生まれたときからそれなりに成長してるんだよね？

「居ないです」

「まさかつ……」

やばい、どうしよう……。

ナパークさんが絶句したまま動かなくなってしまった。

「……………っ！ ミコト様」

「はっはいー！」

「本日このあとのご予約はございますか？」

一分間ぐらい固まっていたと思ったら、なんだか苦虫でも嚙んだみたいな表情で聞かれた。
もちろん予定なんか無い。

「ない、です」

親切にされたので素直に答えてみる。

「それはよかった、では上でお話しましょうか」
「うえ？」

なにがよかったですか？！

そしてお話は決定事項ですかあああつ！

展開が早すぎてついて行けてないですけどー！！

…

…

…

…

そして私は今、最上階の支部長室にいます。

なにこの状況…。

なんかのフラグだったの？

死亡フラグじゃないよね？よね！？

ヤバい緊張で皮膚がピリピリしてきた。

心なしかじわじわ体力を削られてる気までしてくる…。

「ああ、忘れてました」

って、なにカーテン閉めてるんですかつ。

ランプの灯りが幻想的でいい雰囲気だなおいつ！

ぬおおっさらにヤバい状況になってきてる？！

つかナパークさんにまさかのロリコン疑惑？

ある意味死亡フラグよりたち悪いフラグじゃないかあつ！

「さて…」

ひいひいっ！

ヤバいやバいつここは先手必勝に限るっ！

「話というのはですね「だが断るっ」「…は？」

「ロリコンの慰みになるのも死ぬのも御免こうむる！」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………はあ」

あれ…？

なんか深いため息つかれたよ。

私、なんか間違えた？

第五話「だが断るっ」(後書き)

ナパークは精神的ダメージを受けた(笑)

第六話【お説教マズ怖いっ！】（前書き）

誤解は早めにときましょう。

第六話【お説教マジ怖いつつ！】

結果、ものすごく怒られました。

ナパークさんの後ろに静かに燃える青白い炎を見た気がします。

「誤解は解いていただけましたか？まだのようでしたら最初から…」「バッチリです！ここに来たのは私の素性を聞くためで、カーテンを閉めたのは日差しが私に当たらないようにでありますっ」

ナパークさんコワいつ！ナパークさんコワイ！お説教マジ怖いつつ。

ナパークさんは頷いてすっかり冷めたお茶を飲むと「さて本題ですが…」と切り出してくる。

「まずミコト様は生まれてから15年間なにをしていましたか？」

今日この世界に来たばかりですとはさすがに言えないよね。

「えっと、わかりません」

「どついう意味でしょうか」

「今日、目が覚めたら篝火の宿の一室に居ました。それ以前にこの世界で過ごしていた記憶はありません」

うそは言っていないよね。

「ヴァンパイア族は世界が産み出すのですから、私も今日生まれたのではないのでしょうか？」

「ふむ、確かにヴァンパイア族の誕生については謎が多いですが…、では誰が宿の手続きを？あと誰からあのような大金を？」

管理人様ですとはいえないよね…、どーしよー…。
ここはやっぱり…

「わかりません」

私の言葉にナパークさんが顎に手を当てて考え込む。
これはあとで宿に確認に来るな、絶対。

「まあ、宿については後ほど確認することにしませう。 お金に
ついては…、いいでしょう」

やっぱりな！

でもお金はスルーなんですかつ！
むしろそこが重要じゃね？

「ミコト様は些か不足しているとはいえ、知識をもっておいでです
が誰に教わったのですか？」

管理人様からのプレゼントです…。

「せつ世界からのプレゼントではないでしょうか？」
「世界から、ですか…」

怪しんでるっ！

めっちゃ怪しんでるよっ！

どうしよう、このまま突き詰められても困るんですけど…。
どう言訳したらいいかなあ？

「ふう、まあヴァンパイア族ならあり得そうですね」

あり得るんだ。

「知り合いのヴァンパイア族も気がついたら真夜中に森の中に放り出されていた、と聞いていましたし」

「ヴァンパイア族に知り合いがいるんですか?!」

個体数激少なヴァンパイア族のツテゲット!

「ええ、彼やアナタは運がいいのでしょうね」

「え?」

なんでさ?

「ヴァンパイア族は生まれて直ぐ死亡する確率が激しく高いんです

よ

マジで!

聞いてないんですけど!!

「えっと、どうしですか?」

死活問題なのでぜひ詳しくっ!!

「八割が生まれてすぐの陽光で死にます」

「……………」

あれ、今日の日中出歩いてたのってマジ自殺行為?

「ぐ、具体的には…？」

「私の実験では日中の陽光下では数値にすると3分で1割の体力消費で、日陰だと6分で1割の消費です」

「陽光下は30分で死ぬのか…」

「………ん？」

「実験、したんですか？」

「はい」

「わー、アツサリ頷いたあ…」

「恐らく実験台になった同族オツ」

「彼は真夜中に、アナタは建物内に移動されたかそこで生まれたのですぐに陽光に当たらずにすんだのでしょう」

「危なかったのね…」

「生き残ったものでも、陽光に照らされて弱まっているところをモンスターに襲われたりして死亡する者が多いです。実際、彼と出会った時は陽光とモンスターの攻撃で死にかけてました」

「そ、そうなんですか…」

「ヴァンパイア族って実は弱い？」

「少しがっかりだなあと考えつつお茶を飲む」

「…薄っ！」

「は？」

「あっえ…なんでもありません」

ヤバイ、お茶のあまりの薄さについて声がでちゃった。

「そうですか、ちなみにミコト様はヴァンパイア族についてはどの
ていどご存じですか？」

「世界の夜が生み出した希少種で、不老であり体力と魔力が多くて
怪力で暗視を使えるって言うのと…陽光下での身体能力60%減っ
てことです」

言ったらまた微妙な顔をされました。

「独り立ちについては？」

「大体15〜20で独り立ちをするんですよ」

「ギルドについては？」

「冒険者、魔術師、職人、神官のギルドがあつて冒険者の武器職業
以外は各神殿で職業を変えられるのは知ってます」

「ギルドカードやアイテムボックスはご存じなんですよ」

「はい」

「通貨や物価：生活知識は？」

「生きていくのに困らない程度には」

「つまり？」

「簡単な料理や家事全般、食材についての知識はあります」

なんだろう？尋問されてる気分になってきた。

第六話【お説教マジ怖いっ！】（後書き）

説明文の次は質問攻め…、読みづらい文で本当に申し訳ない。

第七話「上げて落とすとかたち悪い」(前書き)

お気に入り50件越え!!!

読んでくださってる皆様ありがとうございます!

第七話【上げて落とすとかたち悪い】

「20歳をすぎて、どこのギルドにも登録できなかつた人がどうなるか知っていますか？」

「いえ」

「ギルドに登録すると年に一度税金を納めますが、納められないとどうなるかは？」

「知りません」

「家や土地の購入方法は？」

「わかりません」

うう、10歳の知識にそんなのないよ。

つか税金払うのかよっ！

いくらだろうっ…。

「……… 奴隷はご存じですか？」

「……… 存在だけは」

この世界には奴隷が居るってのは識ってる。

正直いやだな。

隷属の首輪を付けられていて所有者が死んだら奴隷も道連れ。

いつの時代の王様だよ！

「この国の主な領地やダンジョンについては？」

「この領地にダンジョンが有るのは識ってます」

よく考えたら世界のことまったく知らないじゃん！

現在地がわかるんだからそのぐらいの知識も欲しかったよ管理人様！

「職業や称号については？」

「…？」

すみません、質問がアバウトすぎです。

「…というところ？」

「そうですね、ミコト様なら槍術士で私なら剣術士ですが…そう言った職業の種類と獲得条件。 称号もどうしたらそれが獲得できるかと言ったものですが…ご存じないんですね？」

「詳しくは知りません…」

魔術使ったら魔術師とかにさくつとなるんだと思ってました…。

「槍術士のレベルが1ですが、他の武器を扱ったことは…ないですよね…」

「はい」

今日この世界に生まれましたからね！

「わかりました」

「え？」

なにがですか？！

まさか…トリッパーだとばれましたか？！

「ミコト様の知識は10歳ほどの修行にでる前の幼子を持っている程度ですよ」

「修行つて？」

滝にでも打たれるんですか？

「そのままの意味です。ミコト様は昨日まで剣も振るったことのない子供がいきなりモンスターと戦えたり、鍛冶道具を持ったこともない子供がいきなり鍛冶をできると思えますか？」

「無理です」

高確率で死ぬんじゃない？

鍛冶だつて相当の経験が必要なはずだし。

「その通りです、ですから10歳を超えたあたりから修行に出るんです」

意味はわかりますけど、結局言いたいことがわからないので首を傾げてみる。

「つまり、ミコト様は年は15歳でも実質生まれて一日しか経つておらず経験が全くない。しかも独り立ちする為の知識も足りない。そんなミコト様が冒険者ギルドに登録したこと事態が無謀だったわけです」

「っ！！」

ショックだ。

なんかわかんないけど激しくショックだっ。

「ぎ、ギルド登録したのが取り消されるとか、ですか？」

ヤバい、泣きそう。

登録消されたらどうやって生きていこう…。
その前に私の知識じゃ独り立ちすら出来ない、もしかして一人で生活もできない？
生活資金だつてさっきアイテムボックス買ったから減ってるし、モンスタードロップ売るにしても日中に戦うのは無謀だし…。
ダンジョンなら陽光は届かないけどなぜかギルド登録してないと入れないんだよね…。

お先真つ暗じゃん…。

「取り消したりしませんからそんなに落ち込まないでください」

うなだれた私にナパークさんが慌てて言う。

そっか、よかったあ。

これでとりあえずダンジョンに入ってちまちま経験値稼ぎつつお金も稼げば生きていけるかもしれない。

「よかったです」

うん、この世界での生活に希望が見えた。

「ですが、このままミコト様を独り立ちした冒険者として扱つことはできません」
「なっ！」

上げて落とすとかたち悪いです！
つてかどうしると…。

「ミロト様」

「はい……」

「今からみっちり修行していただきます」

「は？」

「安心してください、この私がミロト様を立派に独り立ちさせてみ
せます。まずは知識と……レベルを10にしましょう」

あれ？

これって何展開？

…

…

…

…

…

…

…

し、死ねる……。

一夜漬けにもほどがあるって！

なんで普通1年以上かけて覚えるものを一晩で！？

しかもナパークさん途中でいなくなつたし！

戻ってきたときに持つてきてくれたお茶は薄いし、晩御飯も薄味だし……ってか、素材の味100%って感じだし。うう……塩分と糖分がほしいっ。

「さて、そろそろ私は仕事に戻りますのでミコト様はその扉の奥の仮眠室でお休みになってください」

「はい」

あまりも頭を使いすぎてぼーっとしたまま頷く。

「今夜は近場のダンジョンについてレベル上げです。ゆっくり体を休めてください」

「はい……」

「では、よい眠りを」

「……………はっ!？」

ナパークさんが出ていった扉を呆然と見つめる。
今、なんていった？

今夜ダンジョンにいくとかいってやがりましたか？

「どんだけスパルタなんですか……」

つい声に出してしまった。

第七話「上げて落とすとかたち悪い」(後書き)

ミコトががんばってる間、ナパークも動いてましたよ？

【閑話】裏ではいろいろありました。(前書き)

ミコトが勉強してる間、ナパークがいろいろしていたようです。

【閑話】裏ではいろいろありました。

正直、ナパークは非常に焦っていた。

世界が産み出したからある程度の知識があるというのはいいのだが、その知識の乏しさに思わず世界に恨み言といいかけるほどだった。

(それにしても、所持金といい宿といい謎過ぎる)

ミコトに世界地図を見せながらナパークは今後のことを考えていた。今のこの状況は正直いって【ありえない】のだ。通常生まれて直ぐのヴァンパイア族は神託を得た神術士に保護される。

もちろん保護される前に死亡する確率のほうが高い。

それなのにミコトは目が覚めたときに宿屋にいたという。誰かが保護したにしても姿を見せないのはおかしいのだ。

(さて、いまのうちに神官ギルドに連絡を入れますか)

「ミコト様、少し席をはずしますので…戻ってくるまでに少なくとも地図と各ギルドの特徴は頭に入れてください」

「うえ…、はい」

必死にメモをとるミコトに頷くと静かにドアを閉めた。

「支部長」

「ああ、ちょうど良いところに来てくれました」

ナパークが下に向かう途中で秘書官のムウが駆け寄ってきた。

「ちょうどよくないっすよ」

「何かありましたか？」

「支部長が幼女を部屋に連れ込んだって噂で下は大盛り上がりっす」

(…しまった)

人が少なかったとはいえ居ないわけではなかったの、ミコトを連れ出したまま戻ってこないナパークを何人かがかんぐっているらしい。

「誤解です、知識と経験不足の新人ギルド登録者を保護しただけですよ」

「じゃあなんですつと出てこなかったんすか！」

「勉強中ですから」

「一体なん、の……すみませんごめんなさい」

ムウはナパークがにっこり笑って短剣に手をかけたのを見て慌てて謝る。

本気で殺気を感じたらしい。

「…で、下が騒がしいと」

「ひっ…」

「ムウ君、私は少し下で説明をしますのです、君は今すぐ神官ギルドの支部長に「今すぐ来てください」と伝えてきてください」

「は？……いい、いやいやいやっ！！無理っすよ」

「私の名前を出せば大丈夫です」

ナパークは妙に自信たっぷりに応える。

そこでムウは現在の神官ギルドの支部長が、ナパークの同居人だったことを思い出していやいやながらも頷いた。

まあ、このままここに居てナパークがこれから行う「説明」に巻き込まれたくないからでもあったが。

「……………モンスターでもでたのか？」

「いえ、少し皆さんと（武器で）語り合っただけです」

「…そうか」

ムウに帰宅するところを無理やり連れてこられて不機嫌であった神官ギルドメロセフ支部長、リアマは冒険者ギルドの惨状を見てひどく疲れた顔をした。

「呼び出したのはこれを回復しろとかだったら殴るぞ？」

「まさかそんな下らないことで呼び出したりなんかしませんよ」

心外といわんばかりに顔をしかめてナパークはリアマを伴い上に向かった。

途中、倒れていた冒険者を踏みつけていたような気がしたが気のせいだと必死に思い込む必要がリアマにあったのは、些細なことだろう。

そしてリアマが案内されたのはいつもの支部長室ではなく、その隣

の秘書官室。

部屋の住人であるムウは現在必死に下の惨状の後片付けをしているところだろう。

「今日は支部長室じゃないのか？」

「ああ、客人が使っています」

「客？」

「ヴァンパイア族のお嬢さんですよ」

「はああああ?!」

リアマは久しぶりに大声を出した気がした。

そんなリアマにナパークは気にした素振りもなく話を続ける。

「だから、明日の夜は予定を空けておいてください」

「意味がわからん!!」

「はあ……」

「え?私が悪いのか?なんでため息を私がかれるんだ?!」

「まあ、説明して差し上げます」

「何気の上から目線だな、お前……」

ぐったりとソファに寄りかかったリアマはナパークの説明を聞いて再び大声と共に飛び上がる羽目になった。

「ありえん!!」

「そうですね、でも実際隣の部屋にはミコト様がいらっしやいます」

「……うそをついている可能性は？」

「色々質問してみました、おそらくありませんね」

「信じられんな……」

呆然とソファに座りなおすのを確認してナパークはお茶を飲む。

「私を呼んだのは保護の為、か」

「いえ」

「は？」

「彼女はすでに我が冒険者ギルドの人間です」

「……ナパーク、しかしそれは」

「彼女の意思が最優先です」

そういわれてリアマは何もいえなくなる。

ヴァンパイアの保護は神官ギルドの管轄だが、当人が別のギルドを希望してしまえばそれ以上は手が出せない。

「ではなぜ私を呼び出した」

「明日の夜、ミコト様を連れてダンジョンに行くので付き合ってください」

「は？」

まさかのパーティ依頼に顔が引きつる。

だがナパークは本気であった。

「ミコト様が怪我でもして後が残ったら大変でしょう？」

冒険者ギルドメロセフ支部長、ナパーク。

かつては国にその名を轟かせた冒険者は、父性本能か保護欲が目覚めたらしい……。

「あと、ついでに神官ギルド本部にミコト様のことを知らせてきてください。保護者はアナタと私でいいですよ」

「そう、だな」

自分達が保護者であれば本部も下手な手出しはしてこないとリアマも頷く。

「それから、篝火の宿にいつてミコト様の部屋の手続きをした人物を聞いてきた下さい、できれば追跡も」

「……わかった」

「あと、あの年頃のお嬢さんが必要な洋服や雑貨なども調達してきてください」

「わかった……ってまで！なんだその雑用は」

「私には仕事がありますし、あの年頃のお嬢さんの必要な物なんてわかりませんから」

「私にも仕事があるんだが……」

「休めばいいじゃないですか」

さも当然のように言われた上に首を傾げられてリアマはめまいに襲われた。

（私、なんでこんなヤツに惚れたんだ？）

リアマの口から文句のかわりに深いため息がもれた。

【閑話】裏ではいろいろありました。(後書き)

リアマとナパークは夫婦ではありません。同居人です。

第八話「諦めてくれ」(前書き)

リアムさんと「対面」w

第八話「諦めてくれ」

目が覚めたらランプの灯りに照らされた部屋のベッドの上。
太陽なんて見えないよ？そもそもこの部屋窓ないし。
まあ、陽光なんか洩れてたら死亡フラグだからなくていいんだけどね。

それにしても昨日？のスパルタ授業のせいかまだ頭がぼーっとする。
さて、今は何時だろ？

ナパークさんが夜になったらダンジョンで鍛える、とか無茶言ってくれやがってますので気になる。

あー、差し出された暖かいミルクが胃に染みる。

夕べのお茶は薄くて最悪だっただけにほっとするわあ。

さて…少し脳みそがはっきりしてきたので現状確認。

寝る前と部屋の床面積が違う。

いやそれも違うか。

床が沢山の荷物で埋まってる…。

そしてなにより、暖かいミルクをくれた見知らぬ人物、あなたはいつたい誰ですか？

【個人鑑定

リアマ 59歳 女 レベル68

職業 神術士レベル52

所属ギルド 神官ギルド

称号 神官ギルドメロセフ支部長】

………は？

「大丈夫か？」

「………はい、多分」

多分大丈夫じゃないです。

ナパークさんといい、この人といい何なの？

お偉いさんってこんなにあっさりあえるものなわけ？

「そうか、ナパークは手加減を知らないからな…知恵熱でも出してないか心配したんだ」

ですよー。

独り立ちの為の基本知識とはいえ、一晩でつめこまれたら普通知恵熱ですよー。

いやあ、途中からこっそりステータス再振りでボーナス武器消して、ダメ元で作業効率アップにポイント注いだかいあったわあ。

作業効率八倍で21P…、便利かもしれない！

「どうした？やっぱり熱があるのか？」

黙ってたらリアマさんが心配そうに額に手を押してくれた。

なんか暖かくて気持ちいいなあ。

「えっと大丈夫です、ちょっと考え事をしてました」

「考え事？」

「はい………」

なんで神官ギルドの支部長さんがここにいるんですかとか、この床

の荷物は何ですかとか、いったい今何時なんだろうとか。とりあえず……。

「ナパークさんはどこに行ってるのかな、とか……」

「ああ、アイツはまだ仕事だ。終わるのは二刻後だ……とこるで」

仕事ですか、じゃあまだダンジョンには行かないのか。

「ナパークは起きたら自己紹介をしようとっていたが、なぜ名前を知っている？」

あ、ヤバッ。

鑑定で見えてましたとかはさすがに言わない方がいいよね。

「……さっきナパークさんの名前を言っていましたから」

言ってたよね？ね？

「ああ、そう言えばそうだったな」

っしや！ セーフ！！

危なかったあ……。

鑑定なんてスキル使えるの会計士だけだしね。気を付けよう……。

「はい、えつと……」

「ああ、私はリアマだ。神官ギルドの支部長をしている」

はい、知ってます。

「本日付けでナパーク共々、ミコト嬢の保護者になったのでよろしくたのむ」

「は？」

「え？」

保護者？

私はもう冒険者ギルドに登録したから保護者とかいらぬはず……。

「もしかして聞いてないのか？」

聞いてませんとも！

「ナパークに修行をつけてもらうんだよな？」

「えっと……多分」

ダンジョンで鍛えられるみたいだし。

「ナパークに保護を要請したんじゃないのか？」

そんな記憶はまったくないです！

びっくりして首を横に振ると、リアマさんは眉を寄せた。

「あのヤロウ」

こわっ！なんかこわっ！

「……………ふー。まあいいだろう」

なにがいいんですか、まったくわかりません。

「ミコト嬢、本来ならナパークが説明しておくべきことなんだが私から話そう」

「はあ…」

「ヴァンパイア族を世界が生み出したら、普通は私のような近くにいる神術士に神託が降りて、神官ギルドで保護することになる」

うん、勉強しました。

「だがミコト嬢の場合は神託が降りずにいたばかりか、自らの意志で冒険者ギルドにすでに登録してしまっている」

はい、さっさと登録に来ましたからね。

おかげで進行形で大変な目に遭ってるけど…。

「つまり保護義務が冒険者ギルドに移ったことになる、というかギルドに登録してしまった時点で保護者はいらなくなるのだが…」

リアマさんが言いにくそうに息をつく。

「あまりにも未熟な為、急仕立てでそれなりの経験と知識を付けさせる必要がでてきた」

未熟って……。

心に一万のダメージだよ！

「ちなみに、そんなことが本部に知られたらどんな手出しをしてく

るかわからないから、昨日私が神託を受けて保護し、本人の希望で冒険者ギルドにすぐ登録したことになっている。……………というかなる」

なにゆえ未来像？

「だから、登録日をごまかせるギリギリ一週間で頑張っレベル15になっくれ」

「……………は？」

それって普通は数年かかりますよね？

「大丈夫だ、今夜から早速ダンジョンに潜っ鍛えるから」

いや、そういう問題ではなく……………。

「もうすでにナパークがミコト嬢のギルド登録日をいじってるから」

犯罪の臭いがしますが！？

「諦めてくれ……………、私も手伝っから」

リアマさん、なんか哀愁が漂っってますね……………。

ちなみに、床いっばいの荷物は私用の着替えや雑貨、防具に武器。そして一週間分の食料をはじめとしたキャンピングセットだった。

この世界に来て二日目、今夜からダンジョンに泊まり込み合宿みたい
いです。

第八話「諦めてくれ」（後書き）

リアマは実はノリノリで買い物してきたので尋常じゃない荷物量です。

第九話「どうぞお気になさらずに」(前書き)

ある意味死亡フラグが立ちそうな回

第九話「どうぞお気になさらずに」

さあ、いよいよダンジョンに向かうんだし、仕方がないから気合いを入れますかっ！

……そう思ってた時もありました。

「す、すまないミコト嬢」

いえいえ、いいんですよリアマさん。

「ナパークから15歳の少女としか聞いてなくてだ……」

ええ、ええ。

事実その通りですから。

「大きさまでは、その……」

ふっ、ふふふ……。

「まさかこんなに小さ」「どうぞお気になさらずに」「…そ、そうか」

今何をしてるかって？

リアマさんが買ってきた戦闘用にもなる服やら諸々な防具の試着ですがなにか？

ちよーっと丈が長かったり、袖から手が出てなかったりしてるだけ

ですよ。

あーっ動きにくっ！

つかこの世界の15歳はそんなに背が高いのかよ！

くっそー……………チビっ子いじめだ。

しかも質素が美德なの？とか言いたくなるような飾り気のない厚手のワンピース…。

露出してるのは首から上と手と膝から下のみ。

感想はダサっ…いやいや、頑丈そうな服だね。

袖を折ってベルト（と言う呼び名の紐）で丈を調節する。

「今度ちゃんとミコト嬢に合う服を作ろう」

「いえ…」

自分で服ぐらい頑張って縫いますから気にしないでください、って
かりアマさんやナパークさんの服を見る限りオーダーしたところで
デザインに期待は持てません。

ギルド支部長でそんな質素で頑丈そうなワンピースにローブですもんねっ！

くっそっ、総合技術力3の弊害か？

でもローブ自体の布地も縫製もいいんだよなあ、デザイン発案能力が足りてないとか？

「ミコト嬢？」

リアマさんのローブをじっと見ていたら首を傾げられた。

「なんでもありません」

「ん？……ああ、もしかしてローブが欲しかったか？すまない、槍術士と聞いていたので邪魔かと思って兼用のは買ってこなかったんだ」

……つまり、兼用じゃないのは買ってきたんですか。

「いえ、大丈夫です」

この服を見るかぎり普段着も期待できないなあ。

兼用が厚地、普段着がもうちょっと薄手な感じだけっぽいし。

「防具は体に合うように自動で調整が効くんだ」

便利だ、その機能が服に欲しいところだなあ。

なんて思いながら籠手や胸当て、ブーツを着ていく。

動きやすさを重視したので最低限らしい。

鎧というよりは弓道着+ブーツみたいな感じかな？

「いい感じだな、動かしづらい部分はあるか？」

ぐるぐる腕を回したり足をあげたりストレッチをしてみる。

「問題ないです」

「そうか、それは何より」

ちょっと重い気がするけどなれば平気っぽいかなあ。

「槍も持ってみるか？」

「あ、はい」

言われて渡された槍を持ってみる。

なんというか、軽い。

プラスチックで出来たおもちゃの剣並みに軽い。

なんつーか、心許ないなあ。

「重くないか？」

「いえ、大丈夫です。ちょっと心もとないですけど」

正直に言ったら目を丸くして驚かれた。

「すまない、これ以上の槍はこの街の武器屋には置いてないんだ」

へー………って、はあ？

つまりこの街で売ってる最高の槍を買ってきてくれやがったのですかっ！

私はもうそんなにお金持ってないんですがっ！

「ナパークならもうちょっと上物を持っているとは思っから、あとで確認しよう」

いやいやいや、そこまでしなくてもってか代金払えないと思っのでやめてください。

ってか服とか雑貨の代金どうしよう……。足りるかなあ？

「どうした？ナパークのお下がりには嫌か？」

「違います」

「ならなんだ？眉間にしわなど寄せて…」

そういつてシワをのばすように眉間をマッサージしてくれる。

「私、これ全部の代金分のセル持ってないかもしれません」

出世払いとかでも大丈夫かなあ？

「何だそんなことが」

「え？」

「私とナパークはミコト嬢の保護者だぞ？ミコト嬢の身の回り品や
独り立ちの準備を整えるのはあまり前だ」

なんですとー！？

「だめですっ昨日今日知り合っただばかりなのに！」

申しわけなさすぎる！

「気にするな、私もナパークも金なら余ってるし、ヴァンパイア族
の保護に使った金額は申請すれば神官ギルドが払うことになってい
る」

マジ？

「まあ、ヴァンパイア族はそのぐらい希少なんだ」

へー。なんかやっぱりすごいね、レア度

！

「ならちゃんと申請してくださいね？」

言わないとしなさそうだから釘を差しておく。

「ああ、忘れなかったらな」

……笑顔で返してきました。

これは絶対申請しなさそう……。
どうしよう……。

考えているとドアがノックされた。

「入れ」

「おはようございますミコト様」

「おはようございます」

大分おそようですかね。

「ああ、準備は出来てるようですね」

「いや、武器なんだが……その前に……どうしたミコト嬢？」

こういうのはちゃんといなくちゃ。

「ナパークさん、リアマさん。この度は会ったばかりの私の保護並びに修行にお付き合いいただきありがとうございます。本当に感謝しています」

「いえいえ」

「気にするな、受託者として当然だ」
「ですが……！」

これだけは言っておかなくちゃいけない。

「私にかけた費用はちゃんと神官ギルドに申請してください！只でさえご迷惑をおかけしてるのにお金までなんて申しわけなさすぎてつつ！！」

半泣きで叫ぶと二人は顔を見合わせて困ったように眉を寄せる。

「ミコト様、ちゃんと申請しますから安心してください」

「あ、ああ…。ちゃんと申請する」

よかったあ。

「でも迷惑とは思ってないですよ」

「ふえ？」

「そもそも迷惑ならリアマに押しつけければいいですし」

「おい…」

何気に酷いこと言っなあ。

「ミコト様が放っておけなかつたんです」

ナパークさんの隣でリアマさんも頷いている。

「だからミコト様、迷惑をかけてるなんて思わないでください」

「……はい」

いい人だ！やっぱりナパークさんは良い人だ！

「私が修行をつけるのは初めてですので、ミコト様が初弟子となり

ますから少しワクワクしています」

「はい？」

なにゆえ？

「この私の初弟子がヴァンパイア族なんて、国中が注目しますよ」

「え？」

なぜだろう、嫌な予感がする。

「ナパークはこの国一番の冒険者と言われた男だ」

「は？」

「頑張りましょうね」

なんでそんな有名人がなんで受付とかしてるんですかああっ。
というかつ！

これはいったいなにフラグだああああ！

第九話「どうぞお気になさらずに」(後書き)

まだダンジョンに行けてない…だとう？

第十話【既になんか疲れた】（前書き）

やっとダンジョンに到達です。

そしてお気に入りが100件突破！！

やばい、心臓がバクバクする……っ

皆様本当にありがとうございます（〇〇）

第十話【既になんか疲れた】

「さて、ここが目的のダンジョンです」

「ちなみに去年できたもので、現在も攻略中だ」

陽もとつぷり暮れすぎだ真夜中と言って良い時間、私達は規模の小さめのダンジョンの入り口に来ている。

「確認されているのは15階まで、見た目の規模からして20階ほどの小規模ダンジョンだと思われれます」

へー、私から見たらただの馬鹿でかい土の盛り上がりですが…。

洞窟でも山でもなく、土の盛り上がり。

だいたい5階建てマンションぐらいの高さかな。

しかし、やっとダンジョンについたのかぁ。

長かったなぁ…。

まぁ、ここに来るまで色々あった。

自己紹介する気まんまんだったナパークさんが、先に自己紹介てなおかつナパークさんの名前を教えてしまっていたリアマさんに拗ねたり。

木箱と仕切り用の板を貰って雑貨や服を用途別に5箱に纏めてからアイテムボックスに入れた私に驚かれたり。

なんで驚くのか聞いたらアイテムボックスには単品をそのまま入れるのが普通で、箱に入れて纏めるといふ発想が今まで無かったと言

うことに私が啞然としたり。

部屋を出たところにいた秘書官さんになんかやたらと哀れみのこもった目で見られたり。

受付があるところまでいったらその場にいた人からやっぱり哀れみのこもった目で見られたり。

ダンジョンに向かう途中でナパークさんとリアマさんが、修行の為に一週間休みを取った事実を知って私が恐縮したり。

それに対して二人が今まであまり休みを取ってなかったからむしろ喜ばれた、とフォローしてくれたり。

夜なのでお約束の酔っ払いが絡んできたと思ったら、ナパークさんを見て悲鳴を上げて逃げ出したり。

閉店間際のお店の人がリアマさんに残り物の野菜やお肉をくれたり。

二人に挟まれた私を見た道行く人がなんか驚いてたり。

ダンジョンの入り口の見張りの人がナパークさんを見て悲鳴を上げたり。

見張りの人が私をやっぱり哀れみのこもった目で見えてきたり。

色々あった……。

ダンジョンに入る前に既になんか疲れた気がする。

そして、今現在ダンジョンの入り口で何をするかということ…。

「では早速パーティーを組みましょう」

そう、パーティーを組むのだ。

「ミコト様、頭の中でも声に出してもいいのでパーティーに入れない人物に向かってパーティー要求をしてみてください」

いや、してみてくださいって言われても…。

「……」

頭の中でナパークさんとリアマさんにパーティー要求って考える。すると二人がパーティーに入ったのがわかった。

「成功ですね」

こんなんでもいいのかっ！

「次にリーダー譲渡、と私かリアマにしてください」

言われてナパークさんにリーダー譲渡と考える。

「はい、完璧です。リーダーとそうでないパーティーメンバーの違いは、メンバーを増やしたり減らすことが出来るか出来ないかです」
「あと、ダンジョンに入るときはリーダーがギルドカードを持っている必要がある」

ふむ、ゲームみたい。

「パーティーメンバーはお互いの位置がなんとなくわかるようになります。また、モンスターを倒したときの成長エネルギーは人数分に分割されて吸収されるようになります」

「あとは、魔術師が使うテレポートはパーティーメンバー全体に作用するな」

ふむふむ。

「まあ、パーティーについてはこのぐらいですかね」

「はい」

忘れないように反芻しながら頷く。

「では入りましょう」

促されて暗くポツカリ開いたダンジョンの入り口の中に入っていく。

「……………なんか重い？」

一言でダンジョンの中を表現するならこれしかない。
空気がなんだか重く感じる。

通路は光苔？みたいなものがあるおかげで明るいのに。

「そうですね、この感覚がダンジョンとダンジョンでない場所との違いです」

ふむ、みんなこの感覚はあるのね。

「進みます、準備をしてください」

「はい」

アイテムボックスから槍を取り出してしっかりと握る。

ちなみにナパークさんが持っている槍は丁重にお断りした。ボーナス武器も今回はお休みさせてる。

「左の通路にモンスターが居るな」

「では左に」

リアマさんはモンスターの居る場所がわかるみたい。いいなあ。

「……ん？」

「モンスターの場所はどやったらわかるんですか？」

「ああ、索敵と言うスキル能力だ」

ふむ、ステータス設定にそんなのがあった気がする。

「私でもそのスキルはとれますか？」

「あー、受託と同じで才能の部分が大きいからなあ」

リアマさんが考え込む。

「目隠しをして、モンスターの居る場所に一週間ぐらい放置されたり取れたりもする」

なんすか、その物騒な取得方法。

「そうですね」

まあ、持ってもおかしくはないってのがわかったしいいか。

「でたな」

「ですね」

無言で歩いてたら目の前にモンスターが現れた。

【モンスター鑑定

ヨトウムシ レベル3

弱点 火

スキル なし

ドロップ 織毛、毛、銅】

「ひっ……」

芋虫の集団っつ！

ここはゴブリンとか狼とかじゃないのかよ！

芋虫とかマジ鳥肌っつー！！

「まずは私が見本を見せます」

いつの間にか槍を装備したナパークさんが一歩前にでる。

「槍術の基本は突くこと」

そういつて一匹を突いて殺す。

「次に叩く」

向かってきた芋虫を上から叩く感じで潰す。

「そして払う」

生きてた三匹をまとめて払って壁に叩きつけてから留めに突いて殺す。

死んだ芋虫から何かエネルギーが体に流れ込んでくるのがわかる。

これが成長エネルギーかな。

生き物を殺すという行為が嫌だ、とか甘いことを言う気はサラサラない。

というか何も感じない。

そのことを頭のどこかでヤバいかも…と思いつつも、これがこの世界の日常だと納得している。

モンスターは殺すものだ。

「わかりましたか？」

ナパークさんが芋虫集団を殲滅してから振り返る。

「はい」

槍の基本動作はわかった。

実践できるかはまだわからないけど…。

「では、リアマ…」

「…このまま真っ直ぐだ」

リアマさんの先導で歩くと程なくしてまた芋虫が現れた。
今度は一匹。

「ミコト様、やってみてください」

「はい」

槍を握りなおして芋虫と対峙する。
緊張で皮膚がピリピリしてきた。

第十話【既になんか疲れた】（後書き）

芋虫の集団……書きながら想像して実際鳥肌がたった（<―>）

第十一話【鬼がいる】（前書き）

この戦闘シーンに年齢制限はあるだろうか？

第十一話【鬼がいる】

「……………あれ？」

気合いを入れて芋虫を突き刺したけど、意外とあっさり刺さった。こんなもの？

首を傾げてそのまま横に払って壁に叩きつける。

「お見事です」

ナパークさんが誉めてくれるのを背中で受け止める。

殺したモンスターからエネルギーが流れ込んでくるのを確認してからも、しばらくじっとモンスターを見つめる。

色が抜けたように白くなって消えた後にはドロップ品が残った。

なんか、殺したっていう感覚がわからない。

敢えて言うなら駆除？

そう、害虫駆除したみたいな感覚。

うーん、前の世界では部屋に入り込んだ虫か台所の黒いアイツぐらいしか殺したことないから、自分で殺すのはもっと抵抗があると思っただけだなあ。

異世界転生補正？

それとも私っておもってたよりもと薄情なのかなあ？

「大丈夫か？」

「はい」

リアマさんが心配そうに肩をたたいてきたので振り返って頷く。

「ミコト様、モンスターを殺すことに対する抵抗はありますか？」

「不思議とないです」

「それはなによりです。モンスターには人型に近い物も存在しますから、殺すことを戸惑って死んでいく人も少なくないですからね」

人型か…。

「人型は、どう感じるかまだわかりません」

きつと戸惑うと思う。

いや、戸惑って欲しいと思ってる。

「戸惑わずに殺しなさい」

「え？」

「人型のモンスターはいずれも強力です、戸惑っていたら殺されま
すよ」

ナパークさんは真剣な顔で言う。

「モンスターは、殺さなければならぬモノですよ」

「……………はい」

押され気味に頷いたら真剣な顔から優しげな顔に戻ってくれた。

「それにしても、流石はヴァンパイア族です」

「そうだな」

空気を変えるためか話題が変わった。

「一撃で殺せるとは流石に思いませんでした」

「リアマさんが買ってきてくれた槍が良いものだからですよ」

謙遜でなく心のそこからそう思う。

なのに2人は武器に振り回されないことこそがすごいと褒めくる。

なんか逆に萎縮しそうなんであんまりほめちぎってこないでください。

褒められると伸びるけど、褒められすぎると萎縮しちゃうんですってば！

うう…いたたまれないっ。

「次っ！次のモンスターに行きましょう！」

いたたまれなさすぎて思わず叫んでしまった。

「いや、行かなくてもいいぞ」

「は？」

「集団で来襲ですね」

えー、芋虫集団とかもう嫌なんですけど…。

「その前に…」

ナパークさんが呟いたとたんにパーティーから外された。
なんでさっ！？

「お一人で倒せるようですので、がんばってください」

わー、笑顔ですよこの人…。

え？なに？これって何プレイ？

「来たぞ」

ぎゃああああっ！

キモッ！！！！

キモすぎるううっ！

マジで10匹を越える集団がウゾウゾ近づいてくるしっ！

逃げたい！

むしろ逃げるが正義だよっ！

「一歩でも引いたら更なる集団の中に放り込みます」

ひいっ！

ナパークさん、アナタはテレパスですか？

ぎこちない動作で振り返ると、イイ笑顔のナパークさんと引きつった笑顔のリアマさん。

前門の芋虫集団、後門のナパークさん…。

や、やってやらあっ！

「いやああああっ！！」

「いい気合いです」

「いや、あれは絶対悲鳴だろう」

相手は芋虫じゃなくては黄色いサツマイモ、相手は芋虫じゃなくては黄色いサツマイモ、相手は芋虫じゃなくては黄色いサツマイモ。

自己暗示ですがなにか？

ぶつぶつ悲鳴混じりに自己暗示をかけながら殺していく。

『シヤアアア』

「ううっ?! いやああああっ」

槍は強力だしリーチもあるけど、その分接近されると弱い。つまり、集団と戦ってる私は不利ってことなんだよね。

なにがいたいかって言うと……。

「いつの間にか近づいてるしいっ!」

一匹射程圏から突破された。

そして私のとつた行動は……。

「見事な蹴りですね」

「よく咄嗟に蹴る反応がとれたな」

そう、蹴った。

サッカーのシュートばりに思いっきり。

吹っ飛んだ芋虫は壁に激突してお亡くなりになりました。

だがしかし、それに気を取られてる暇はなかった。

「いい加減全滅してええ！」

まだ生きてる芋虫が向かってきてるからねっ！

「はあっはっはあ……」

っ、疲れた。

体力よりも精神的に！

計15匹を倒しきって壁にぐったりと寄りかかる。

「お疲れ」

リアマさんが差し出してくれた水筒から水を飲んで息を整える。

「では次に行きましょう」

ちよっ！

「少し休ませてやれ」

リアマさんナイスです。
まじでちよっと休みたい！

「怪我でもしましたか？」

「いえ」

「なら大丈夫ですね」

なにが？！

「今の戦いの感覚を忘れないうちに体にたたき込んでいきましょっ」

……………鬼が居る。

基本的に多分いい人なのに鬼だっ。

継るようにリアマさんを見つめる。

「……………諦めてくれ」

うわーんっ！

またそれで片付ける気ですかあああ！

第十一話【鬼がいる】（後書き）

ある意味、主人公より濃いナパークさん。。。

【閑話】とある日、とある処で…（前書き）

ミコトの死因は流れ弾に当たってですが、どうしてそんなことにな？！
な、謎解明。

【閑話】とある日、とある処で…

『 未明、滞在中の日本人が 　　の抗争に巻き込まれ 　　り、死
亡しました』

ニュースにしたらその程度の情報。
でも、僕にしたらあまりにも衝撃的な出来事。

(ミコト先生…)

死んだ日本人は僕の日本語の先生だった人。
ある日突然辞めてしまったけれど、僕を家の跡取りではなく【僕】
として見てくれた人。

(…許せない)

握りしめたせいで手のひらに爪が食い込んで皮膚が破ける。

父に言えば報復戦をしてくれるだろうか？
もとはといえば、憎まれることの多い我が家に勤めたのが悪かった
のだ。

そうでなければ今回の抗争に巻き込まれなかったはずだ。
少なくとも…父とあの日に会っていなければ、流れ弾になんて当た
らずにすんだはずだったのだから。

(でも、お母様は喜んでいるのかもしれない)

彼女を辞めさせたのは母だと確信している。
僕の家庭教師としてつれてこられた先生と父との不倫を疑っていた

から。

辞める直前は先生自身が父とも言い争っていたようだった。もし本当に不倫関係にあったのならなにか揉めていたのかもしれない。

そう考えると、父に報復戦を頼んでも無駄かもしれない。

* * *

僕は今ミコト先生のお墓の前に立っている。

知らなかったけど先生には身寄りがなかったらしい。

巻き込んで死なせてしまったけじめにと祖父が葬儀を行い墓を建ててくれた。

葬儀には祖父と父と僕と、あとは先生の知り合いだと言う人が数人寂しい葬儀だった。

そしてやはりお母様は、来なかった。

父も祖父の手前渋々出ているといった様子だった。

祖父は、義理堅い人だから今回の責任を深く受け止めているようだ

った。

* * *

「先生、僕は今年で21歳になりましたよ」

墓前に花を添えて話しかける。

あの後、祖父の一言で報復戦が行われた。
血で血を洗うような抗争だった。

父と母は、その抗争で死んだ。

我が家は今祖父が動かしているが、もうじき僕が受け継ぐことになるだろう。

コッ、

「来ていたのか」

「お祖父様……」

杖をつき、花を抱えてボディガードも付けずにやってきた祖父に目を見張る。

その腕にある花はミコト先生が好きだといっていた花で、毎年命日にこの墓に置かれていたものだった。最初に墓に添えられているのを見たときはなんて不吉なことをするのだと激怒してしまった記憶がある。

けれどそこら辺の花屋ではなかなか手に入らない黒バラ。

2回目に来たときにそれが先生の好きな花だったと思い出してからは、花を持ってきている人物に興味がわいた。

その人物はきつと彼女のことを好きだったに違いないから。会って、話があった。

けれど、ずっと会いたかったのに僕が来たときにはいつもすでに花だけ置かれていて、人影はなかった。

「お祖父様だったのですか？」

「なにがだ」

まさかそれは祖父だなんて想像もしていなかった。

「その花を毎年先生のお墓に置いていつていたのは、お祖父様だったのですか？」

「……………」

それには答えず祖父は墓に花を添えて祈りを捧げる。長い、とても長い祈りだった。

「あの子には…、ミコトには申し訳なかったと思っている」

「それは…」

それは何についてだろう？

我が家の抗争に巻き込んでしまったこと？
それとも、もつと別のこと？

問いただそうとしたら、まるで答えを隠すように強い風が吹いた。

「　　れて　　なければ、　　早く　　れば」

「え？」

「あの子を、　　が死んで　　のは、私のせいだ」

「お祖父様？」

風が止み、祖父の背中を再度見つめる。

「すまない」

それは誰に向けての謝罪だろうか。
僕に対して？

それとも、先生に対して？

【閑話】とある日、とある処で…（後書き）

とある【家】同上の抗争に巻き込まれたようです。

そして名前すら出てないけどやっとなががが登場しました！

第十二話【笑ってごまかすか】（前書き）

前半部分は伏線になってない伏線です。

第十二話【笑ってごまかすか】

『私、黒バラが好きなの』

『なぜですか？』

『というか、黒が好きなの』

『なぜですか？』

『だって黒はそれ以上になりようがないでしょ？』

『意味がわかりません』

『全ての色を内包してそこに存在する色でしょ、黒って』

『それで結論はなんですか？』

『強い色じゃない、そして優しい色』

『では、白は嫌いなんですね』

『どござしてっ』

『黒とは逆だから』

『馬鹿ね』

『ひびいてます』

『白は全ての光の集合体よ、黒の対であって真逆じゃないの』

『そんなものですか』

『興味なさそう』

『はい』

『まったく、これだから男はっ』

『では、私はミコトに黒バラを贈ります』

『え？』

『大切な日に、なにがあっても必ず贈ります』

『大切な日って？』

『とりあえずは誕生日です』

『この年になるとあんまり大切じゃない気がしてくるけど…』

『ははは、それはますます贈りたくなります』

『もー、意地悪なんだから』

* * *

「夢、か…」

ずいぶん懐かしい夢をみたものだ。

あ、でも実はそんなにな経ってないのかな？

一晩寝ていくぶんスッキリした気がする。

昨日はあれからまた芋虫の集団に突っ込まれること8回。

階層を変えると言われて2階にいったら、今度はイエローハウンド
：つまり黄色い犬モンスターと戦わされた。

芋虫と違って動きは早いし攻撃力はあるしで、最後の方は一回死に
かけた。

ナパークさんが一撃でその時の集団を殲滅させたけどね…。

くっそう、なにあの強さ！

ずるくない？

つか衝撃波でイエローハウンドがまとめて死ぬとかなんなの？

人が苦戦してるってのに！！

とはいえ、さすがに死にかけたので休憩という名の睡眠時間をいた
だきました。

ついでに寝る前にリアマさんに治療術をかけてもらった。

なんつーか、体力全快になる栄養ドリンク飲んだ後みたいになって、

逆になかなか眠れなかった。

「おはよう、ミコト嬢」

「おはようございます」

差し出された暖かいミルクの入ったコップを受け取って飲む。

あー、空きっ腹に染みるわー。

「ミコト様、おはようございます」

「ナパークさんもおはようございます」

ナパークさんからはサンドイッチ（みたいなもの）を差し出されたのでありがたくいただく。

……お塩とコシヨウをもっとかけたい。

相変わらずの薄味&素材の味ですね、ありがとうございます。

塩やコシヨウがない訳じゃないしなあ…。

節約？それとも単に薄味派なのかな？

もそもそとサンドイッチ（みたいなもの）を租借する。

今日もまたイエローハウンドの中に突っ込まれるんだろうなあ。

キャンキャンキャンキャンと耳なりしそうだわあ。

「ミコト嬢、カードをみせてくれ」

「あ、はい」

アイテムボックスから取り出して渡す。

あれ？微妙な顔された。

「ミコト様、カードの更新をしてください」

「どうやってですか!？」

「え?自動とかギルドとかでするんじゃないやなくて自分でするの?それってどうなの?」

「カードをもって更新するとも思えばいい」

受け取ってじっと見つめながら「更新」とつぶやく。
一瞬カードが震えて数字が変わった。

【ミコト=カガリ ヴァンパイア族 女

15歳 レベル5

職業 槍術士レベル7

所属ギルド 冒険者ギルド

称号 なし

所持奴隷 なし

所持金 55705セル】

「おー、大分レベル上がったじゃん！」

「そっすいえば取得経験値八倍と成長率八割増加つけてたんだった。んー、ってことは8×1.8?.....14.4倍で成長中?」

「すごいな、私！」

「うんうん、早期レベルアップはRPGの鉄則だよねえ。」

「.....」

あれ？カードを覗き込んできたナパークさんたちが固まってる。
なんかまずいことで、も……あるよ！あるじゃん！！
今まさに私の手の中に……！

「あ、あははは……」

「……ミコト様（嬢）」

「ひゃいっ」

約14倍成長とかないですよねっ。

やばいっやばすぎる。

完全におかしいと思われたあ……！

どういいわけしよう……笑ってごまかすか？！

「特殊能力もちだったのか？」

「レベル5で槍術レベル7になっているのならイエローハウンドごときに手こずらないでください」

は？

いや、リアマさんはともかくとして。

ナパークさん、つつこみどころはそこですか？

「こんなに早くレベルが上がるなんて、相当な特殊能力付きでない限り無理だろう」

「えーっ……」

なんといつたらいいのかわかりません。

「ヴァンパイア族の成長は早いのは実験済みですから、まあ予想の範囲内です。ちょっと早すぎる気もしますが……」

ナパークさん、ヴァンパイアでどれだけ実験したんですか。つてかまさか私も実験材料?!

「普通、レベル3のヨトウムシを5匹でレベル2に、25匹でレベル3、125匹でレベル4になるんだ」

3から4になる為の数が桁違いって…。

「まあ、レベル3になったらレベル5のイエローハウズクラスに移行してしまうのが一般的ですね」

へー。

「ちなみに3倍くらいの成長エネルギーが取得できます」

ふむふむ。

つまり、えーっと…約42匹であがるのね。

「で、レベル4から5になるには…レベル5イエローハウズ210匹ってところだ」

……………5倍ずつあがっていくのか。

だんだんエグい数になっていきそう。

でも、私はその1/14ぐらいでいいんだよねー。

「まあ、ヴァンパイア族というのと昨日の戦いぶりからレベル4にはなっただろうとおもってたんだが、それ以上だったな」

あー、まあ。

なんでもかんでも「ヴァンパイア族ですから！」ですみそっつていうのはわかった。

ってか、ヴァンパイア族ってもしかして皆私と同じ転生者？

……まさかね。

「さて、確認も終わりましたので。イエローハウন্ズの集団に飛び込んで準備体操をした後に3Fにいきましょうか」

………はい。

もう昨日一日でいろいろ諦めました。

長いものには巻かれるのが一番です。

第十二話【笑ってごまかすか】（後書き）

この話でストック分が切れました（<―>）

第十三話【十分規格外】（前書き）

話が全く進まないのはなぜだ…（；、、）

第十三話【十分規格外】

お約束のイエローハウンド狩りです。
キャンキャンキャンキャンガルルルってな感じに囲まれ中で命の危険をひしひしと感じて……………ない。

気分的には「はんっ雑魚が何匹集まっても無駄なんだよ!!」って感じ?

昨日死にかけたことなんか忘れましたが何か?

突いて払って突いて払って、を淡々とこなしていく。
流れ作業見たくなってきたのは慣れてきたからかな?

【モンスター鑑定

イエローハウンド レベル5

弱点 なし

ドロップ 毛皮、牙】

うん、同レベルに負ける気しないわ。

ところで、大分レベルがあがったので、鑑定スキルで自分の鑑定を試してみたらなんか色々増えてた。

【ミコトカガリ

ヴァンパイア族 15歳 レベル5

属性：闇、雷、水

職業：槍術士レベル7、魔術士レベル5、会計士レベル7

控え職業：製造士レベル1、拳術士レベル2

所属：なし

所属ギルド：冒険者ギルド

所属奴隷：なし

装備：ハルバート、回復の指輪、アイテムボックス腕輪型

常時スキル：暗視

任意スキル：鑑定、レポート、闇魔術、水魔術、雷魔術、

槍技能、拳技能、製造技能、会計技能

特殊能力：取得経験値八倍、成長率八割増加、ステータス再振り、

第三職業、作業効率八倍】

鑑定スキルに が突いたからなのか特殊能力が見れるようになった
みたい？

そして、職業が増えてた…。

会計士はアイテムボックスか日傘を買ったからかな？

製造士は…たぶんアイテム整頓するのに箱をいじくったから？

謎なのは拳術士と闇魔術の。

拳でなんか戦った覚えはないし、魔術なんか二人の前で使えるかば
けえ!!!

「っしょいつと」

槍の射程圏を突破して来たイエローハウンドの頭を踏みつける。

拳術士かあ、素手ってことだよねえ。

ずっと槍で戦ってるのになあ。

「邪魔っ」

じたばた動くので足蹴にしてたイエローハウンドの頭に一旦全体重
+ をかけて砕く。
つて！ 私が重量級みたいな殺しかたしちゃった。
なんかやだなあ…。

「なあ、さっきから気になってたんだが」
「なんですか？」

「ミコト嬢が足で攻撃してるときに魔力を感じる」

「ふむ、頭をあの体重と筋力で踏み砕けましたし、無意識に闇魔術
を使ってるのでは？」

「ばかいえ、魔術士でもないのに魔術を使うには私のように特殊ア
イテムが必要だぞ」

「ですがヴァンパイア族は闇魔術を無意識に攻撃に付与してるみた
いですよ」

「はあ？そんなことはじめて聞いたぞ」

「まあ、実験の副産物的に『多分そう』と感じているだけでしたか
ら、報告はしてませんでしたね」

「……………いつもながら実験されてた彼が気の毒になってくるな」

「いやですね、彼は積極的に実験に協力してくれてましたよ」

「……………その協力の引き換え条件が…ああ、片付いたな」

「そのようですね」

最後の一匹を突き刺して死んだのを確認してから二人を振り返る。
なにか話してみたんだけどなんだったのかなあ？
まあ、いいけど。

ふと周りを見るとドロップ品の毛皮とかが落ちてた。

初めてドロップした毛皮に触ってみたらわりとゴワゴワしてた。この手触りじゃ服とかには向かないかなあ？

んー、まあいつかあ。

回収してアイテムボックスに突っ込んでいく。

ああ、ちなみに芋虫のドロップ品も織毛以外は回収済みで結構たまってる。

ナパークさん曰わく売っても安くて、子供のお小遣い程度にしかないらしい。

でも、織毛はともかく毛と銅はわりと使えそうなんだけどなあ。

「大分慣れてきたみたいですね」

「はい」

素直に頷くとナパークさんは「では3Fに行きましょう」「とか言うて先に行ってしまった。

なんてマイペース！

慣れてきたけどねっ。

そういえば3Fのモンスターはなんだろう？

長虫系じゃないといいんだけどなあ…。

いや、マジで長虫系嫌いだからっ！

3Fに行く途中に出てきたイエローハウンドはナパークさんが瞬殺していく。

う、動きが見えない…。

ナパークさんってホント強いなあ。

「まてっ」

「おや…」

入り口の前に球体が赤い浮いていた。

【モンスター鑑定

ファイヤーエレメント レベル8

弱点 水

スキル 火魔術

ドロップ 火結晶】

モンスターかよっ！

槍を構えるとリアマさんが前に出て私を制した。

「エレメントには物理攻撃はほとんど効かない。属性付き武器での攻撃か魔術のみ有効だ」

なにその無茶設定！！

「私でも属性付き武器がなければ、エレメント系だとレベル20の相手をするのは一苦労です」

マジですか！！

あれ？じゃあ、リアマさんは？

魔術士じゃないから魔術なんか使えないはずじゃ？

「ですが、リアマはグラングリモアの所有者ですからね」
「グラングリモア？」

リアマさんを見たら見覚えのある本を左手に持っていた。

あー、昨日治療魔術かけて貰ったときに持ってたのと同じだ。

「神官ギルドの秘宝の一つで、所有者はスキル治療と己の属性魔術
を使えるようになります」

なにそれ！ちょー欲しい！！

「水よ我が意志により集結せよ、ウォーターアロウ」

「ましてやリアマの属性は水。ファイヤーエレメントなんて一撃で
終わりますよ」

ナパークさんの言葉の通りファイヤーエレメントは一撃で消えた。

しかし、なるほど「水よ我が意志により集結せよ、ウォーターアロ
ウ」か。

覚えておこう…。

ちなみに治療術の呪文は「内なる力よ目覚めよ、ヒール」だった。
多分体力回復と外傷治療かな。
解毒とかはまた別な呪文かもしれない。

「ここにエレメント系が出るなど聞いていないぞ」
「そうですね」

おや、なにやら真面目なお話？

「ここに入って帰還しなかった者が多数出ていましたから、もしかしたら今の当たったのかもしれないね」

「なるほど、出会った奴が全員死んでいたら報告も上がらないか」

ほへー。

そんなにやっかいなんだ、エレメント系って。

でも会う人と会わない人が居るって微妙くない？

運の問題なのかなあ？

それとも法則があるとか？

「ほら」

「え？」

リアマさんが赤い結晶を投げてよこした。

これって火の結晶？

「持つておくといい」

「悪いですー！」

多分レア品？をホイホイ渡さないで下さいっ！

「火の結晶なんか、邪魔なほど持つてるから私はいらん」

邪魔なほどってどんだけ？

「なら有り難く頂きます、ありがとうございます」

ナパークさんもただけどリアマさんも十分規格外な気がしてきた。

第十三話【十分規格外】（後書き）

そういうミコトが一番規格外だ！と思う作者です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7095y/>

転生したけど引きこもります。

2011年12月3日23時52分発行